



一貫コース通信

追認と言う形の評価に思う

秋というのは八方美人、枕詞が何にでも合ってしまう。良く巷に於いても芸術の秋と言われが、芸術の方から歩いて来るのがこの季節の特徴でもある。本校の芸術鑑賞教室も又然りである様に。思うに、空気が澄み、空が宇宙に吸い上げられる様に高さを増すのと合わせ、集中力が増す事も一因なのだろうか。

振り返れば、今年の今頃はコロナ禍の為に一年遅れで開催されたショパンコンクールが盛り上がりを見せていた。背景には日本人の入賞者が2名出た事もあったと思う。

名実ともに有名なショパン国際ピアノコンクールだが、元々は意外にも地方の音楽祭から発展し今日に至った経緯をご存知だろうか。初回はポーランド独立9年目の1927年に開催された。当時は今日の様な盛り上がりはなかった様である。しかし、5年毎に開催されるコンクールから、やがて名実ともに実力の伴うピアニストが出る事で、今日の評価を得た。

例えば、これまでの覇者にはハリナ・チェルニー・ステファンスカ(4回覇者)やマウリツィオ・ポリニ(6回)マルタ・アルゲリッチ(7回)の面々が居る。ちなみに、今も現役で活躍している人も居るので演奏を聴くチャンス

は皆無ではない。身近なところではクリスチャン・ツイメルマン(9回)は“福島市音楽堂”でも演奏して、私はその素晴らしい演奏を3度聴いている。

(ちなみに東京の料金の1/3で聴けるのが魅力だ)

蛇足ではあるが、このコンクールは実力者が居ない場合、必ずしも覇者を選ばない。こう言った真摯な積み上げが、今日の様なコンクールの覇者≡これまでの覇者と同等の実力と言う評価を作り上げた。賞を埋める為の人選などしない、と言う確固たる信念が評価を創った。同様の事は間もなく発表されるノ

ーベル賞にも当てはまるのだろうか？ 結果的に受賞者は世界の誰からも認められる。新聞を初め各種の報道はこぞって報じるので、この時期、一色に染まる勢を感じる。特に、科学部門の受賞は新聞よりやや専門的に雑誌“ニュートン”等でも紹介されるので、毎年の受賞者がどんな事を研究し評価されて受賞に至ったかの概要は何となく解る。しかし、その一個人が他の誰よりも優れているかは、正直のところ私達には解らない。何故なら、分野が違えば評価の基準や、受賞直前の各学問分野の到達レベル等、何に於いても到底解り様が無いからである。従って、恒例の事としてノーベル委員会の透明性が取りざたされるのだが、結果的には122年の歴史が権威も含め評価を決定づけているのかも知れない。受賞したのだから、きっと凄いのには違いない…と言うのがこの手の評価だと思うのである。

これらと異なり素晴らしさが一目瞭然なのがスポーツ界の各賞だ。スポーツ界は他のどの分野より透明性が明確だ。理由は、多くの観戦者の目前で試合(勝負)が行われるからだ。観衆≡証明者でもあり、勝ち負けは明白だ。よって勝っても涙、負けても涙の可憐さがスポーツ各賞の魅力に相違ない。いずれにしても評価は成果に対し、外から付与されるものなのだ。

